

父と娘

張 黎

中学二年になった娘は、以前とは全く違う人になってしまったようです。昔は毎日笑顔で私に学校であった出来事を話してくれたのに、今は会話がほとんどありません。娘の名前は湘寧。絵を描くことと、学校の演奏部でクラリネットを吹くことが大好きです。しかし、勉強となると興味がなくて、成績は常に私の心配の種になっています。

「湘寧、もうすぐ高校受験だぞ。このままじゃ、いい高校に入れなぞ。将来のために、今はしっかり勉強しないとダメだ」と私は何度も言いました。しかし、娘はいつも「勉強したくない」とだけ答えます。私は娘に、良い大学に入り、良い仕事を見つけ、自分の人生を自分でコントロールすることの重要性を教えようとしています。それは、私が人生で学んだ一番大切な経験です。しかし、私の言葉は娘の心に届かないようです。

ある夜、娘が部活の練習から帰ってきました。いつもより疲れているようでした。「今日はどうだった？」と聞くと、「練習が難しくて、よくできなくて」と答えました。その言葉を聞いて、私は娘に静かに語りかけました。「湘寧が好きなことに情熱を注ぐのは素晴らしいことだ。でも、お父さんが勉強しなさいと言うのは、部活を辞めてほしいからじゃないんだ。好きなことをずっと続けていくためにも、将来の選択肢を広げることが大切なんだ。良い高校、良い大学に入ることは、自由に自分の人生を選べるための土台になる。それは、部活の練習と同じで、将来がもっと輝けるための準備なんだよ」

娘は私の言葉を真剣に聞いていました。しばらくの沈黙の後、ゆっくりと顔を上げ、小さく微笑みました。

この日から、少しずつ勉強にも前向きになりました。娘は勉強と趣味のバランスを取ることを意識し始め、私との会話も増えていきました。私は娘が自分の人生と向き合い、自ら成長しようとしている姿を見て、誇らしい気持ちになりました。そして、父と娘の関係はよくなっていきました。